

コーヒーブレイク



私とプラモデル

会員 村松 謙一 (35期)

「あなた、またガラクタを作ったの。」

「だから、ガラクタじゃないって。」

「私にはどれも一緒に見えるわ。どこに飾るの、もう家には置き場所なんてないわよ。」

「事務所に持っていくから、捨てるなよ。この作品は制作時間100時間だから、時給1万円として、100万円もするんだぞ。」

「誰もそんなもの買わないわよ。」

「そんなことないよ。」

私が趣味と公言しているプラモデル（戦車とフィギュアの組み合わせのジオラマ）作品を完成し、居間で、ウイスキーを片手に、ほろ酔いかげんでうっとり眺めている時のいつもの女房との会話である。

私の作るジオラマはドイツ戦車を中心に小さな人形（兵士のフィギュア）で戦場での廃墟の街を作っていく大人の趣味である。

特にわずか5cmの背丈のフィギュアの制作には相当の時間をかける。顔の表情はフィギュアの命である。時計職人の20倍の倍率のレンズを目にかけて、米粒に字を書くがごとく、精神を統一しておよそ2～3時間かけてゆっくりと表情を描いていく。戦場での恐怖感や戦友を失った悲しみ、戦火の中の束の間の休息時の安堵感、故郷に残した家族を思い浮かべる郷愁感を表現する。わずか5cmの小さな人形達に生命を吹き込む作業に、倒産と闘う私は時間を忘れる。この時間だけは、企業再生弁護士から人形師の顔になっている。NHKの「プロフェッショナル」に出演した時、キャスターからの質問でオンとオフの切りかえについて問われたが、即座に答えたのは「プラモデル制作」だ。

もともと私は静岡は清水の出身だ。静岡といえば、

あの世界のタミヤがある。

清水の田舎では洋画の映画館も珍しく、小学生のころ父親に映画館に連れていってもらったが、その時見た「バルジ大作戦」にでてきたドイツ軍のタイガーⅠ型戦車は今でも強烈に印象に残っている。

しかし、プラモデル少年も小学生までのことだった。

中学生からは甲子園を目指し、野球一筋になり、大学でも体育会野球部に入った。いつしかプラモデルのことはすっかり忘れてしまった。

その後の私の人生は順風満帆だった。そう娘が天国にいくまでは…。

地獄の底を這いずり回っていた私は、自らその扉を閉ざし、一日中身体を横にし、ただひたすら空を眺め、その日一日を乗り越えることで精一杯だった。

三年ほどして、プラモデル屋が目にとまり、仕事帰りにふと立ち寄ってみた。あのタイガーⅠ型とフィギュアが置いてあった。

娘を失った悲しみの中、娘はこの世に再生できなくても、せめて無機質なこの人形達に生命を吹き込み、この世の中に再び、生かしたいと思った。

制作に没頭しているのは、5時間くらいであるが、その時間だけは私を辛い思いから解放してくれる。人形達も私に語りかけてくれた。私の鬱からの解放でもあり、つまり精神療法でもあるのだ。心をこめて完成したフィギュア達は200体を超えた。全て私の子供のような感覚だ。

再生弁護士として助けた企業が100社以上なら、生命を吹き込んだフィギュア達200体が私の事務所の一室で不安で苦しむ社長達を迎えてくれている。

そして、私もジオラマ制作で人生の再生を果たしたと思っている。